

修士論文要旨
2015年7月

認知症患者における嗜好および味覚の変化

指導 長田久雄 教授

老年学研究科
老年学専攻
213J6906
橋本由美子

Master's Thesis (Abstract)
July 2015

Changes of Food Preferences and Taste in Patients with Dementia

Yumiko Hashimoto
213J6906
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J.F.Oberin University
Thesis Supervisor : Hisao Osada

目次

1. 緒言1
1) 背景1
2) 先行研究1
3) 研究目的1
2. 方法1
1) 調査対象者1
2) 調査方法1
3) 分析方法1
4) 倫理的配慮1
3. 結果2
4. 考察2

文献

1. 緒言

1) 背景

厚生労働省によれば，2013年の日本人女性の平均寿命は，86.61年で過去最高となり，また男性の平均寿命も，80.21年となり過去最高となった．超高齢化に伴い，認知症患者は，2020年には325万人にまで増加するとされている¹⁾．認知症の心理・行動異常の一つに食行動異常がある．池田は，前頭側頭型認知症について，アルツハイマー病と異なり，ある程度進行するまでは基本的日常生活動作そのものに問題は生じないが，前頭葉の機能低下そのものに由来する行動異常が出現してくると，食行動異常もみられると述べている²⁾．

本研究は，食行動異常の関連の一つである認知症患者の嗜好および味覚の変化を研究するものである．

2) 先行研究

認知症患者の食行動や味覚の変化に関する研究はいくつかあるが，Uekiらは，アルツハイマー病の患者は，極端に甘いものを好む傾向にあるとしている³⁾．

また，枝広らによれば，アルツハイマー病と血管性認知症において，食事に関連した行動障害は重症度認知症の者ほど増加する傾向がみられたとしている⁴⁾．

3) 研究目的

認知症患者の，嗜好（主要四味 甘味，塩味，酸味，苦味）の変化および味覚の変化について，認知症患者の家族を対象として明らかにすることを目的とする．

中等度以上の認知症患者本人を対象とした場合，嗜好や味覚を十分表現できないことが考えられ，認知症患者の嗜好や味覚の変化をとらえることのできる可能性として，同居家族からの情報を活用することが考えられる．家族を対象として，嗜好や味覚の変化について調査した研究についての報告はなく意義があるものと考えられる．

2. 方法

1) 調査対象者

認知症群は，公益社団法人 認知症の人と家族の会 東京都支部の会員 388名を対象とした．非認知症群は，認知症と診断されていない人 116名を研究担当者の知人から選抜した．

2) 調査方法

認知症群，非認知症群ともに自記式調査票を用いた留置き調査を行った．

3) 分析方法

認知症群，非認知症群の2群の比較は，カイ2乗検定または，Fisherの直接確率法を用いた．統計的有意水準は，5%とした．

4) 倫理的配慮

本研究は，桜美林大学の研究倫理委員会の承認（2014年4月21日 承認番号 13064）を得た上で実施した．

3. 結果

認知症群については、調査票を配布した 388 名のうち、回収数が 168 名（1 通に複数回答あり）で回収率 43.3%，うち 29 名が無効であり、分析対象数 139 名であった。

非認知症群は、116 名に調査を行い、分析対象数 109 名であった。

各群の嗜好の変化については、嗜好が変化したとの回答は、非認知症群は 21.1%であったのに対し、認知症群は、30.9%と比較的高かった ($p=0.082$)。

主要四味（甘味、塩味、酸味、苦味）ごとの嗜好の変化においては、苦味を好むようになった認知症群はなく、有意差が認められた。

認知症患者の病型別の嗜好の変化については、前頭側頭型認知症がある群では、嗜好が変化したとする者が有意に多かった。

病型別にみた味覚の変化については、有意な差は認められなかった。

嗜好の変化があった人のうち、味覚の変化の比較を行ったところ、認知症群において鈍くなったと回答した割合が有意に高かった。

4. 考察

各群の食べ物の好みが変わった人の割合について、数値的には認知症群の方が比較的高い結果となっていたものの、統計学上では有意差が認められなかった。加えて、本研究は、家族に調査をしており、認知症患者の主観的な嗜好や味覚の変化を把握できていない者もいる可能性がありこの差は、より大きくなることも推察される。

主要四味のうち、苦味を好むようになった認知症群はいなかった。

また、嗜好の変化があった人に対して、味覚が鈍くなったと回答した人の割合を分析したところ、認知症群において有意に高かった。

口腔内や、味覚などに関する先行研究について、一宮は、認知症の患者には残存歯が少ないとの報告があり⁵⁾、Schiffmanらは、アルツハイマー病の人は味覚、嗅覚が健常者に比べ悪かったとしている⁶⁾。このような背景から、味覚の変化があったことで、嗜好の変化に影響を与えたのではないかと考えられる。特に認知症群における苦味に関して影響があった可能性が考えられる。

本研究についての課題として次のことがあげられる。認知症群の調査は、病像から家族に対して行ったが、非認知症群は、本人に調査をしている。味覚や嗜好は本人の主観的感觉によるものであり、できれば本人に対する調査が望ましい。主観的評価を十分表現することが可能と考えられる軽度認知障害 (Mild Cognitive Impairment:MCI) 患者を対象とした研究が今後必要と考えられる

枝広は、アルツハイマー病の食事の自立を妨げる要因である食事開始困難への対応が有効であるとしており⁷⁾、このような状況である場合の対応として、嫌いな苦味のある食事を提供しないなど本研究の結果を活用することもできる側面も考えた調査も今後の課題としたい。

また、味覚の変化に対して、薬剤の影響も検討する必要があるが、この点についても今後の課題となる。

文献

- 1) 厚生労働省：厚生労働白書。(2014).
- 2) 池田学：＜シンポジウム9-5＞前頭側頭型認知症（FTD）をめぐる基礎と臨床の最前線 前頭側頭型認知症の症候群学.：臨床神経, 48：1002-1004 (2008).
- 3) Ueki, A., Otsuka, M., et al. : Unbalance of n-6 and n-3 polyunsaturated fatty acid (PUFA) or excess intake of glucose: possible dietary risk for patients with Alzheimer's disease. JNHA, 7 (4) : 208 (2003).
- 4) 枝広あや子, 平野裕彦, 山田律子, 他 : アルツハイマーと血管性認知症高齢者の食行動の比較に関する調査報告. : 第一報－食行動変化について－. 日本老年医学会雑誌, 50 : 651-660 (2013).
- 5) 一宮洋介 : 認知症の予防にはなにをしたらよいか?. 順天堂医学雑誌, 54 : 508-510 (2008).
- 6) Schiffman SS, Graham BG, Sattely-Miller EA, et al. : Taste, smell and neuropsychological performance of individuals at familial risk for Alzheimer's disease. Neurobiol Aging, 23 (3) : 397-404 (2002).
- 7) 枝広あや子 : アルツハイマー型認知症高齢者における自立摂食困難の要因. 歯科学報, 112 (6) : 728-734 (2012).
- 8) 羽生春夫 : シンポジウム3 : 高齢者認知症をめぐる新たな展開と諸問題 4. 生活習慣病からの対応. 日本老年医学会雑誌, 49 : 284-287 (2012).
- 9) 羽生春夫 : 老年医学からみた認知症の臨床. 日本医事新報, 4509 : 71-75 (2012).
- 10) Acelaado MC, Oparil S. : Hypertension in the elderly. Clin Geriatr Med., 25 (3) : 391-412 (2009).
- 11) 植木彰 : アルツハイマー病と栄養. 日本老年医学会雑誌, 43 : 158-160 (2006).
- 12) 植木彰 : 認知症の予防－食事の重要性. : 医学のあゆみ, 227 (3) : 169-173 (2008).
- 13) 池田稔 : 総説 ランチョンセミナー 加齢と味覚障害. 日本口腔外科学会雑誌, 25 (2) : 133-138 (2012).
- 14) 厚生労働省 : 専門的な情報 認知症. (2010).
- 15) 本間昭 : 認知症予防・支援マニュアル (改訂版). 東京都老人研究所, (2009).
- 16) 枝広あや子 : 食べるための力は, こうやって引き出す. 認知症ケア最前線, 41 : 28 - 35 (2013).
- 17) 須藤てい子, 加藤ゆり子, 手塚公博, 他 : 認知症患者における「味の意味記憶」の障害. 認知症ケア事例ジャーナル, 5 (4) : 373-378 (2013).
- 18) 大阪市 : 認知症の医療・介護に関わる専門職のための 「前頭側頭型認知症&意味性認知症」こんなときどうする!. 大阪市福祉局高齢者施策部高齢福祉課 大阪市弘済院. (2014).
- 19) 又賀泉, 土持眞, 土川幸三, 他 : 高齢者における口腔乾燥症の検討 (その1). 日本老年歯科医学会雑誌, 3 (1) : 56-67 (1989).
- 20) 小林園枝, 池邊一典, 佐蔭英則, 他 : 自立した生活を送っている高齢者における唾液分泌の低下が口腔機能に及ぼす影響. 日本老年歯科医学会雑誌, 16 (1) : 87-91 (2001).
- 21) Schiffman SS : Perception of taste and smell in elderly persons. Crit Rev Food Sci Nutri., 33(1) : 17-26 (1993).